岡崎市議会議長　様

支出番号	

会派名　　チャレンジ岡崎
代表者名　　小田　高之

下記のとおり、政務活動を実施したので報告します。

政務活動旅行報告書

令和4年 11月 01 日提出

活動年月日	令和 4 年 10 月 13 日（木）～令和 4 年 10 月 14 日（金）	
氏名	小田　高之、杉山　智騎、近藤　敏浩	
用務先及び内容	1 10月13日	用務先　長崎県　長崎市
		内　容 第84回全国都市問題会議
	2 10月14日	用務先　長崎県　長崎市
		内　容 第84回全国都市問題会議
	3	用務先
		内　容
	4	用務先
		内　容
備　考		

岡崎市議会事務局 受付 4.11.-1 第☆☆号 425

令和４年度　行政視察報告書

令和４年１０月３１日（月）
チャレンジ岡崎　杉山　智騎
小田　高之
近藤　敏浩

１．視察日程

令和４年１０月１３日（木）～１０月１４日（金）

２．視察先及び視察内容

・長崎県長崎市
第 84 回全国都市問題会議

３．視察内容

１０月１３日（木）　９：３０～

・基調講演「民間主導の地域創生の重要性」

株式会社ジャパネットホールディングス代表取締役社長兼 CEO　髙田　旭人

1　ジャパネットと地域創生　なぜジャパネットが 地域創生を手掛けるのか

ジャパネット創業の地である長崎県の 13 市町が消滅可能性都市と判定された。長崎の活性化に貢献したい。ジャパネットは 通信販売事業を「 見つける」「 磨く」「 伝える」 の方針で行ってきた。まちづくりにおいてもこれを活かすことが出来る。「V・ ファーレン長崎」の運営をはじめたことにより地域を盛り上げていきたい気持ちが強まる。プロサッカークラブ「V・ ファーレン長崎」とプロバスケットボールクラブ「 長崎ヴェルカ」のスタジアム・アリーナや商業施設、ホテル等で構成する「長崎スタジアムシティプロジェクト」で地域を活性化させる。2024 年開業を目指し進行中である。

2　行政と民間の役割の違いについて　民間企業の役割は「幸福の最大化」幸せの総量を増やす。

法律に定められていることを除き、公平性に左右されない、行政にはできない思い切った取り組みをする。同時に大きなリスクも負っている。

3　長崎スタジアムシティプロジェクトへの想いと目指すところ

転出する市民から長崎に対し「 遊ぶところがない」「 やりたい仕事がない」「 都会の方が格好いいから」 との声が上がる。高田社長は長崎を非常に魅力的なまちと考える。都市部はコンパクトで路面電車、路線バスが発達している。400 年の昔よりオランダや中国などと貿易し、世界の交易拠点

であった。そのため、カステラやちゃんぽん等独特な食文化がある。長崎くんちや長崎ランタンフェスティバル等祭りやイベントも豊富。灯台もと暗し、目の前に眠るものを「 見つける」「 磨く」「 伝える」の方針でより一層、魅力を感じてもらえるものに変える。「長崎は楽しそう！」「長崎に行ってみたい！」思ってもらえると考えている。それこそが長崎スタジアムシティプロジェクトを行う理由である。そして、人口の増加につなげ、出生率を上向かせ、地域経済を良い方向へ向ける。

4　長崎スタジアムシティプロジェクトで実行するアイデア集

① 荷物の持ち込みを禁止し、荷物チェックを簡素化する。
② 試合後の出庫時間に応じて駐車料金を変える。 例えば、試合終了直後の出庫は割高にし、2時間後を割安に。出庫時間を分散させつつ、スタジアムでの消費を促進。
③ 賃貸オフィスに会議室など共有スペースを提供。借主は賃貸料を割安に抑えられる。
④ 年間シート購入者に高速通信環境を提供するなど特典を与える。
⑤ 商業施設の使用ターゲットを 時間帯で変え稼働率を上げる。
⑥ スタジアム非稼働日にも演出を工夫し集客する。ジップライン、プロジェクションマッピング等を計画中。
⑦ スタジアムにVIPルームを作る。試合のない日はホテルとして利用。
⑧ おいしいオリジナルビールを提供し自家用車での来場者を減らす。
⑨ 試合の前後にも楽しめる番組を放送し、試合開始直前の入場・終了直後の退場の人流を分散させる。
⑩ 語学とスポーツを両方同時に学べるスクールを開設する。
⑪ 長崎大学大学院を誘致する。オフィス入居企業と連携を図る。

これらの企画の効果は未知であるが、ここで、高田社長は自身がジャパネットにおいて行ってきた生産性改善の実例を紹介した。それは、慣例にとらわれない社内ルールを次々と打ち出し、社内の課題を解決してきた実例である。たとえば、書類を減らすためキャビネットを廃止する、残業をさせないため強制的に退社させる、仕事を抱え込ませないため連続した休みを強制的に取らせ、その間は会社からの電話に対応することを許さず、電話に出たものにはペナルティを科す等である。これらのエピソードを高田社長は時々ユーモアを交え、矢継ぎ早に繰り出し、自身の実行力を示し、聴くものにジャパネットという会社の実行力を信じさせることに成功したと思われる。

5　行政に期待すること　官民連携の地域創生

ジャパネットは「長崎スタジアムシティプロジェクト」を成功に導くため、様々なアイデアを企画し実現させていくと思われる。しかし民間企業の力だけでは出来無いことも数多く存在する。例えばスタジアム周辺の渋滞対策の道路交通環境整備やスタジアムへのロープウェイ連結などである。行政だから出来ること、民間だから出来ることを官民連携でおこなう。また、地域住民とも連携して地域を活性化させる。

6　本市への提言

講演の途中から一気に講師の話に引き込まれた。講師の話し方の魅力によるものであろうが、800億円にも及ぶ大きな投資リスクを負っているものがもつ真剣さ、綿密な計画に裏付けされた自信、とことん合理性を追求する姿勢が表す信頼感、そうでありながら感じられる冒険心がこの講演を魅力的で意義のあるものにした。本市においても、公共の投資を頼りにするような企業とは連携して欲しく無い。例えPFI事業であってもジャパネットのような姿勢で臨む事業者と契約を結ぶことを切に願う。

・主報告「長崎市の魅力あるまちづくり」

長崎県長崎市長　田上　富久

「港あり 異国の船をここに招きて 自由なる町をひらきぬ 歴史と詩情のまち長崎 世界のナガサキ…」長崎学の創始者「古賀十二郎」氏の言葉で港への思いが感じられる。その港から長崎は安土桃山時代以降「貿易都市」として栄えたものの、第二次世界大戦にて戦争被ばく地となりながらも復興を果たし、「観光都市」として発展してきた。人口減少、少子高齢化などの重大な課題に加え、新型コロナウイルス感染症の流行により日本のみならず世界も大きく変化した。その中、長崎はわがまちの価値について、４つの視点よりアプローチをしてきた。

（１）　価値を見つける

代表的なものとして軍艦島（端島炭鉱）と恐竜である。軍艦島は長崎の人たちにとっては特別なものではなく、日常の一部であったが、産業革命の遺産としての切り口で見直したときに新たな価値を見つけ、2015年に世界遺産に認定された。恐竜については、「DINOSAURIA」を「恐竜」と訳したのは長崎出身の考古学者横山又次郎氏であり、長崎半島から国内で初めて10m級のティラノサウルス科の歯の化石が発見され新たな価値が見えてきた。そして、2021年10月に長崎市恐竜博物館が開業した。

（２）　価値に気づく

「長崎さるく（さるく：ぶらぶら歩くという方言）」はまち歩き観光の先駆けとなった取り組み。市民参加による企画やガイドにより取り組みを進め、日常の当たり前にも価値があったことに気づき、シビックプライドの醸成に繋がり、観光の土台となった。

（３）　価値を磨く

長崎市では景観専門監制度を導入し、地域の「部分」と「全体」の関係性への配慮や、場所の歴史を踏まえた考え方、市民との協働などを総括的に考慮し、長崎駅周辺再整備事業や各種大型事業や各地の公園や道路や建物などの整備・改修を進めてきた。まちにあるものの価値を磨き高めることで、まち全体の価値を向上させることができる。

（４）　価値を生み出す

「長崎スタジアムシティプロジェクト」や長崎大学が進める「BSL-4」などは、これまで長崎にはなかった新たな魅力を創出し、長崎市に新たな価値をもたらしてくれる。

これからも持続可能な地域社会の構築のために、これらの４つの視点で価値を見つめ直しながら、長崎に住む「土の人」と、長崎を訪れる「風の人」との交流により、新たな価値が見つかり、磨かれ、まちの価値が創られていくものと考えている。

本市も岡崎の価値について考え直すと大きな方向性が見えてくるはず。本市のポテンシャルを活かしきれていない部分も多く、一つ一つの事業がバラバラになっている箇所も多く見られる。価値を見つけ、価値に気づき、価値を磨き、新たな価値を生み出す。本市の価値を向上させる素晴らしい考え方の一つであると考え、提案いたします。

・一般報告「何度も訪れたくなる場所　都市の新たな魅力と関係人口」

島根県立大学地域政策学部准教授　田中　輝美

関係人口とは、短期間の交流や観光という関わり方ではなく、長期間暮らし続けるという定住という関わり方でもない、その間にある新しい地域との関わり方。

何度も人が訪れている事例

【鳥取県用瀬町：体験と民泊　もちがせ週末住人の家】

総務省の「ふるさとワーキングホリデー」を活かし、地元の住民に交じって様々な行事に参加したり、地域の一員として得意なことや好きなことを生かしたイベントの企画実行などを行う。若い世代を中心に 120 人が登録しているコミュニティがあり、定期的に用瀬町に通ってくれるようになった「週末住人 s」は住民と交流を深め、空き家などを活用し、活気を取り戻している。

【島根県雲南市：草刈応援隊】

草刈り＝地球を救う！をコンセプトに年に３回県外・市外のボランティアが 50 人以上集まり、草刈りを行う。住民の困りごとを全国から助けにくる仕組み。

【島根県邑南町：天空の駅】

廃線をライトアップ（イルミネーション）し観光に。他と違うところは、イルミネーションを見るだけではなく、準備や片付けまで行う、働くツアーである。天空の駅（宇都井駅）を中心としたイベントが多彩に。ガバメントクラウドファンディングを活用し集まった 800 万円で廃線を利用したトロッコを走らせ、県外・市外のボランティアが運営も行う。今では関係人口の聖地となった。

関係人口を増やす大切な３つのキーワード

・名前が覚えられる規模（量より質）

・準備から片付け、打ち上げまで一緒に（脱・お客様は神様）

・住民の思いや背景も伝える（ストーリー化）

背景にある二つの変化

地域の変化（人が減ったことで開放性↑）＋若い世代の変化（つながりへの関心↑）＝新しい潮流

ソトの仲間も加える

・交流・観光『短期的に来る人』

・**関係人口『継続的に関わる人』**

・移住・定住『長期的に住む人』

コロナだからこそ大切にしたい３箇条

１．「とりあえず関係人口！」は避ける

２．近く（県内・市内）の関係人口に目を向ける

３．通う以外の関わり方も実験してみる

本市にとっても関係人口はとても大切な要素。どのように関係人口を増やすかを具体的に検討しなければいけない。まずは本市の課題や強み・弱みを把握し、どのようなところを伸ばし、どのようなところを埋めていくかを明確にする必要がある。しっかりと岡崎市を分析するところから行う必要があり、それを踏まえて「選ばれる」まちを目指していく必要があると考える。

・一般報告「ビジョンを活かしたまちづくり　～「選ばれる山形市」を目指して～」

山形県山形市長　佐藤　孝弘

1　山形市は

宝珠山立石寺、 蔵王温泉スキー場 の樹氷 さくらんぼ ぶどう 山形牛 山形ラーメン など 魅力的な地域資源を有する選ばれる街となるため、明確な将来ビジョンを定め様々な政策をそれに結び付けて展開する。

2　二大ビジョンを掲げ選ばれるまちを目指す

ビジョンその１「 健康医療先端都市」人口１人当たりの 診療所数の多いまちであり、 山形大学医学部にて最先端医療を提供している。中核市として保健所を設置。「医療」と「健康」における強みを活かす。

ビジョンその２「文化創造都市」 山形国際ドキュメンタリー映画祭の開催し、山形交響楽団を擁し、東北芸術工科大学が立地し、 ユネスコ創造都市ネットワークの加盟認定を受けている。以上を活かし「文化創造都市」を目指す。

3　「 健康医療先端都市」の為の政策。歩くことをベースにした健康で暮らしやすいまちづくり

保健所内にシンクタンクを設置し、医師など専門職の知見を生かした事業を行う。市民の健康に関するデータを科学的に分析したフレイル対策、減塩事業をおこなう。SUKUSK 生活を推進し健康寿命の延伸を図る。ウォーカブルなまちづくりを推進。健康ポイントで歩行の動議付け。中心市街地に椅子テーブル設置車輌通行禁止道路のテラス化・消雪歩道のネットワーク化で居心地が良く歩きたくなるまちづくり。山形五堰の御殿堰上流地区の開渠化再整備として換地を伴う「七日町歴史と文化活用街区整備事業」を行う。屋内型児童遊戯施設「シェルターインクルーシブプレイス　コパル」は全国から多くの視察を受け入れる。

4　「 健康医療先端都市」の為の政策。「公共交通の充実による」徒歩の補完

公共交通ネットワーク構築、結節点の整備、シェアサイクル導入・サイクリングロード整備、タクシー活用により「徒歩＋自転車・自動車・公共交通・コミュニティ交通」を組み合わせ自家用車に頼らなくても生活できるまちづくりを進める。バスの乗り方教室、市職員のノーマイカー通勤、地域連携 IC カードによる公共交通利用促進。

5　「文化創造都市」の為の政策。文化芸術活動を通じて持続的発展を目指す

山形国際ドキュメンタリー映画祭や山形市が所有し茶道愛好家が利用する清風荘・宝紅庵には全国から人が集まる。「山形市文化創造都市推進条例」制定。文化創造拠点造りとして廃校を利用し「やまがたクリエイティブシティセンターQ1」。文化芸術イベント「山形ビエンナーレ」「やまがた秋の芸術祭」。アーティスト・イン・レジデンスにてアーティストの定住を促す。

6　まとめ

将来ビジョンを明確にし、結びつけた政策を展開した結果、 市民や企業が連動して同時多発的にさまざまな取り組みが進んだ。対外的な発信を進め、人が集う「選ばれるまち」にしていく。

何を目指しているか明確なビジョンを掲げる事は、まちづくりにおいては大変重要なことと改めて思った。またビジョンを分かり易く丁寧な説明をもって市民その他につたえることの重要さを強く感じた。説明では山形市長の情熱も感じられた。ビジョンに結びついた政策の進捗は、その説明が市民その他にしっかり伝わり理解されているかどうかに懸かっている。発表の中で明確なビジョンを掲げた事の効果として議会との良好な関係を挙げていた。その他、換地を伴う「七日町歴史と文化活用街区整備事業」が順調に進んでいるようだが、それも明確なビジョンを掲げた効果であろう。

・一般報告「交流の産業化」を支える景観まちづくり　～長崎市景観専門監の取り組み～

一般社団法人地域力創造デザインセンター代表理事　髙尾　忠志

部分が全体の価値を上げる事業を継続的に行うこと、これが景観専門監の職務ではないかと講演を拝聴し思うところでした。

市長の提案により、約10年前に設置された景観専門監は長崎市が掲げる「交流の産業化」戦略を達成するため、①長崎市が行う公共事業のデザインの指導と管理と②長崎市職員の育成をミッションとしています。①については、都市計画や景観はもちろんのこと、広義における都市デザイン、例えば、花壇の整備や冊子の作成の業者決定に至る事業にまで関わっています。②は現場での職員との議論を大切にし、専門家の立場から、さまざまな助言をしているとのことです。

以上のミッションと職務を持つ景観専門監の特徴は行政がその構造上どうしても抱える空間と時間の分断を紡ぐことにあります。空間とは縦割りとも揶揄されるものですが、これは組織の効率を求める上で致し方ない部分もあります。他方で、これは部分を最適化するものの、例えば公園なら公園その外側に出て、全体を最適化することを苦手とします。それを、景観専門監は組織横断的に、全体最適を見通しつつ、調整することを可能とします。時間もまた組織の問題です。都市計画など長期にわたるプロジェクトにおいて担当課は同一でも、その課を構成するメンバーは入れ替わります。また、過去に実施したプロジェクトの維持・改修は一度、時間的に切断されます。この時間を再縫合することが景観専門監の仕事です。

本市にとっても、想いとデザインの一貫性を担保する一つの可能性として、景観専門監の配置は一考に値することを付言しておきます。

１０月１４日（金）　９：３０～

・パネルディスカッション

【テーマ】個性を活かして「選ばれる」まちづくり　～何度も訪れたい場所になるために～

【コーディネーター】東京都立大学法学部教授　大杉　覚

【パネリスト】ゆとり研究所所長　野口　智子

山梨大学生命環境学部教授　田中　敦

NPO 法人長崎コンプラドール理事長　桐野　耕一

岐阜県飛騨市長　都築　淳也

兵庫県伊丹市長　藤原　保幸

今回の講演で通奏低音として流れていたのは「関係人口」をいかに増やすのか、ここにあります。当然のことながら、最終日のパネルディスカッションもその観点から事例や研究発表がありました。一通り聞き、思うのは、関係人口を増やす、その政策は自治体の規模と風土におおきく影響するのではないかということです。換言すれば、この風景を残したい。この暖かい(と少なくとも個人的にはそう感じた)地域をなんとかしたい、助けたい、そのように憐憫の情を生む場所が関係人口を生み出しやすい素材であり、それは山間や海沿いの町にあるのではないかということです。他方で、地方のそれなりの中核市、ベットタウン、なんとなく人口減少は進んでいるが、僻地とは相対的にマシである、そんな自治体が憐憫の情を生むことによる関係人口増加の手法はそぐわないと考えるものです。岡崎市は後者です。ただ、後者には利点があります。それは、そもそも、故郷が岡崎である、仕事で岡崎にいったことがある、など、基本的な人口が多いからこそ、すでに関係を持った、持つ人が多いことです。そのような方を囲い込む制度、仕組みを構築する方が、本市のこれからを考える上ではそこが大切なのではないでしょうか。